

木の文化・木のおもてなし  
ガイドブック2019  
【モデルツアー・公開座談会】

KYOTO

HIDA

ODATE

KASHIMO

ShiroWakui × KengoKuma × David Atkinson

## ▶ 目次

[「木の文化・木のおもてなし」の考え方](#) — 2

[「木のおもてなし」につなぐ、日本の「木の文化」の構成要素と視点](#) — 3

[先導モデルの3つのパターン](#) — 4

[木の文化・木のおもてなし モデルツアーのご紹介](#) — 5

[千年続く、京の森と木の文化をたずねる  
～都を支えた丹波・北山文化～（京都府京都市・亀岡市）](#) — 6

[恵の源流ツアー  
～飛騨市広葉樹のまちづくり～（岐阜県飛騨市）](#) — 12

[AKITASUGI ツーリズム  
～秋田杉へのこだわりと新たな宝の発見へ～（秋田県大館市）](#) — 18

[裏木曾加子母  
～樹を知る 木と暮らす～（岐阜県中津川市加子母）](#) — 24

[木の文化・木のおもてなし ツアー・プログラム企画化のヒント](#) — 30

[公開座談会  
『世界に誇る 日本の「木の文化・木のおもてなし」を考える』](#) — 32

2018年度事業の成果紹介 — 35

## 「木の文化・木のおもてなし」の考え方

日本は古来より生活のあらゆる場面で木を使い、木に親しんできました。それらは暮らしの有り様や衣食住と一体化したものであり、必然的なものであったに違いありません。本事業では、日本が培ってきた「木の文化」とそれを活かした多様な「木のおもてなし」について、主に来日観光客等の視点から再評価し、新たな形の「木の文化」と「木のおもてなし」の創造・発信を目指す取り組みを進めています。

そのためには、空間や製品単体ではなく、その背景や森林との共生・循環、技や物語性、木と異素材を組み合わせたデザイン等を合わせて伝えることが必要です。「モノ」から「コト」への変換を図り、日本の木の文化の持つ「本物感」や「奥深さ」を訴求できると考えられます。

・木を用いた伝統工芸や伝統的建築物に「木の文化」に着目した「新たな視点や価値」「ストーリー性」を付与し、体験や購入などのソフトプログラムと一体化した工夫があること。

・地域材や国産材を使った建築物、空間、製品等に「木の文化」に着目した「地域の個性や特徴」「歴史や人、技術などの価値」を付与し、体験や購入などのソフトプログラムと一体化した工夫があること。

これらを満たすことで、地域内資源の面的集積や地域独自のキャッチーなコンセプトを開発して、日本の「木の文化」を活かした建築・空間・製品等による「木のおもてなし」を実現し、結果、新たなインバウンド等の観光需要の創出や新たな木の建築物等の価値・魅力と需要の創出、新たな木製品の価値・魅力と需要の創出につなげていくことを目指しています。

## 「木のおもてなし」につなぐ、日本の「木の文化」の構成要素と視点

「木の文化」のストーリー性を構成する要素として、以下の4分野・8要素が考えられます。これらの「木の文化」の要素を有するとともに、それを活かした「木のおもてなし」の価値を形成している取組を、先導モデル事例として選定しました。

## 共生

### ①産地や作り手を慕う

生産地の環境や、生産者の想いや工夫・努力に目を向け、寄り添い、慕っている

### ②足るを知る

資源の循環利用・多段階利用、もったいない精神、自然との調和を実現している

### ③地域性を活かす

地域の気候・地理、歴史・文化、生業・生活が持つ特色とつながっている

### ④時を刻む／活かす

木の持つ時間的価値（経年美化、改修の容易性・自ら手入れする）が活かされている

### ⑤技を活かす

熟練の技や卓越した技術が木の良さを引き出し、用の美や情緒を生み出している

### ⑥軸を持ちつつ変える

伝統的価値を軸に据えつつ、現代の生活様式に合う意匠・機能・用法にしている

### ⑦和の心を伝える

日本ならではの心情や所作、作法や趣き等を、木を活かして表現・演出している

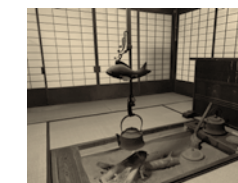
### ⑧暮らしが潤う

木を適切に活かすことで居心地・使い勝手を高め、心豊かな暮らしを育んでいる

## 風土

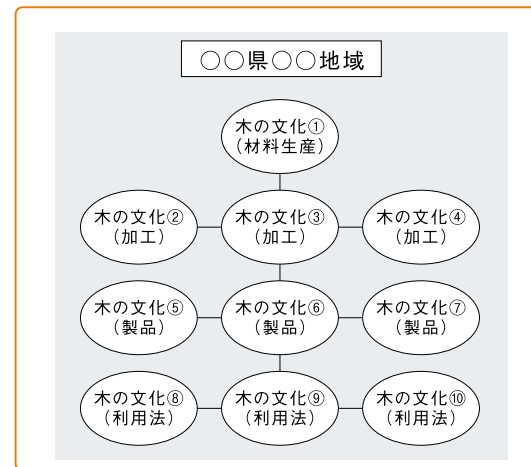
## 技

## 心



## 先導モデルの3つのパターン

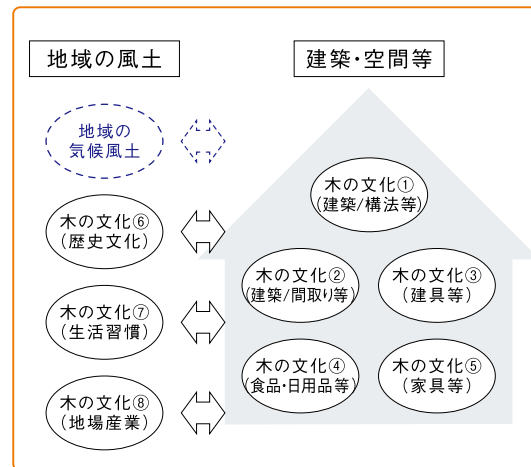
これまで調査・分析した各地域、各分野の事例から、先導モデルとして下記の3つのパターンを考えました。これらを組み合わせたり、さらに進化させたモデルも考えられます。いずれも地域が持つ木の文化を背景として、前ページにあるような木の文化の要素を活かして、多様な分野・多業種が関わり、ハードとソフトを巧みに融合していることが大切です。



### パターン1:地域集積モデル

多様な「木の文化」を支える技術・製品群等が面的な集積された地域(建築・建具・家具分野)

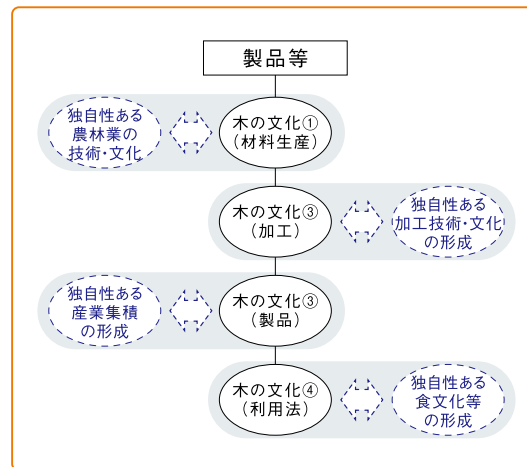
地域において、木の文化を支える材料生産から加工技術、製品や材料を活かした建築、その利用法までが集積し、それぞれが関係性を持ちながら、地域の特性や個性につながっているもの。



### パターン2:拠点発信モデル

多様な「木の文化」が集積されている建築物・空間・街並等(観光分野-交通・宿泊等、まちづくり分野-文化・交流等)

地域の気候や地理、民俗や風習、地場産業などが木を使った建築物等の構法や間取り、設備、建具や家具、日用品等に活かされ、そこでの暮らしを支えたり、来訪者の滞在や体験、交流へつながっているもの。



### パターン3:異分野連動モデル

周辺分野の技術・文化と連動して、多様な文化の派生に寄与する製品等(食分野、伝統工芸分野)

木の文化としての材料生産や加工、製品、利用法などが農林業や加工技術、産業や食文化などの周辺分野と時には地域をまたいで連動し、独自の発展・進化を遂げて、多様な文化を生み出しているもの。

## 木の文化・木のおもてなし モデルツアーのご紹介

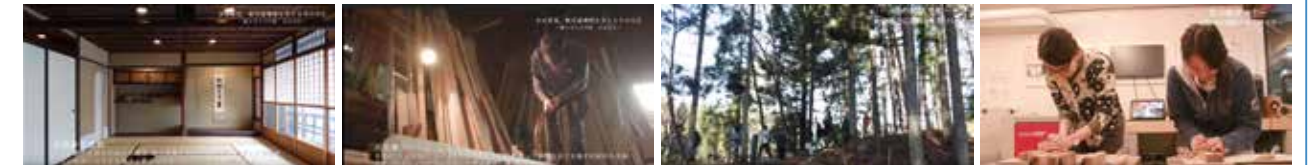
2018年度には、基本的な考え方や視点、展開モデル、参考事例を紹介した「ガイドブック」を制作するとともに、モデル的な「コンセプト映像」、検討委員の「特別インタビュー映像」を制作しました(35ページ参照)。

2019年度では、これまで森林視察や木を使った建築物の観光、木工等のものづくり体験など、個別のツアーであったものを、地域内の林業・木材関係者と観光・まちづくり関係者等が連携して、地域内に集積された「木の文化」のストーリーに基づいて再整理・再編集し、「木のおもてなし」を面的に体験できるモデルツアーを4地域(京都府京都市・亀岡市、岐阜県飛騨市、秋田県大館市、岐阜県中津川市加子母)で実施しました。これにより、地域の持つ木の文化のコンテンツが多様なプログラムへ活用でき、観光や宿泊、飲食、癒しや健康増進、教育やモノづくり体験など幅広い分野の事業者、組織団体が参入できるようになりました。特色ある地理・気候・歴史・慣習を活かした木の文化は、地域の魅力的な資産であることに改めて気づくことができました。モデルツアーの実施にあたり、対象プログラムは以下の視点を重視して選定しました。

- ① 特徴的な「木の文化」の構成要素を複数有し、地域の歴史文化・生活様式・地場産業等との関係性の“ストーリー”の深掘り・再整理がなされていること。
- ② 地域内で複数の資源を面的に集積し、地域ならではの独自性があり、キャッチーなコンセプトが確立されている事例・テーマ群(地域)であること。
- ③ 複数の施設・製品群等に一貫する「木のおもてなし」の世界観が構築されていたり、「木の文化」の特徴の“ストーリー”を体感できる空間・プログラムが構築されていること。
- ④ 「木のおもてなし」施設等を拠点に、地域への滞在を促す多様なソフトが構築されていること。
- ⑤ 地域の林業・木材関係者、旅行業者、観光施設(見学・物産等)等で「木のおもてなし」を活かした事業モデルが構築されていること。

本ガイドブックはウェブサイトから閲覧、ダウンロードできます。また、京都、飛騨の2事例については、ツアーの内容や狙いを映像にまとめた「プロモーション映像」の制作も実施しました。いずれも右のアドレスからご覧いただけます。

<http://www.green.or.jp/topics/omotenashi/>



## 千年続く、京の森と木の文化をたずねる ～都を支えた丹波・北山文化～

京都では「京の茶室文化、数寄屋建築を支える木の文化を探る」を実施しました。千年近い時を経て受け継がれる京都の木造建築文化。これらを支え続けてきたのは、木を育てる林業の営み、丸太を板に加工する製材所の技術、そして大工の緻密な職人仕事です。どのような木を、いかに加工し建築用材として活かしてきたのか。そして「茶室文化」を支えてきた京の美意識、おもてなしの心や営みとは。普段訪れることのない現場をめぐり、話を聞くことができる貴重なツアーです。

### ツアー行程

#### 【1日目】

- ①道の駅ウッディー京北、和風レストランけいほく
- ②北桑木材センター(京都市右京区京北)
- ③京都北山杉の里総合センター(京都市北区)
- ④中川地区見学(北山杉・木材倉庫など)

#### 【2日目】

- ⑤有斐閣弘道館(京都市上京区)
- ⑥へき亭
- ⑦亀岡の森と桂川、製材所見学(亀岡市)
- ⑧原田銘木店(京都市右京区京北)



#### 有斐閣弘道館(京都市上京区) map4

京都市上京区上長者町通新町東入ル元土御門町524-1  
TEL:075-441-6662 <https://kodo-kan.com/>

江戸中期の京都を代表する儒学者・皆川淇園(みながわきえん)の学問所であった、弘道館を事例に、茶室や数寄屋建築の考え方とそこに埋め込まれた木づかい・数寄屋大工の技を感じます。茶室はそれぞれ趣きが異なり、こちら選仏寺は通常、非公開ですが美しい茶室と中庭が印象的です。



#### 京都選仏寺 map5

京都市上京区天神道上ノ下立売上る北町581(通常は非公開)



茶室の床柱等として、  
北山杉の磨き丸太・絞り丸太等を生産する

#### 中川地区の案内 京都市北区中川北山

京の北西部の地域で生み出される森の恵みと職人の技を訪ねました。中川地区の北山杉から磨き丸太、京北地区では広葉樹から床柱・京名栗などがつくられています。名栗(なぐり)とは「ちょうな」という道具で柱や板を規則的に削って(はつる)独特な加工を施す、伝統的な技術で京都の茶室などの数寄屋建築には欠かせない職人技です。サビ丸太は樹皮を剥いだ木材に黒褐色の斑点状のカビがはえたものを乾燥させた化粧材で、茶室の柱などに使われます。





山林の中で杉皮をはぐ



京都北山杉の里総合センター [map3](#)  
京都市北区中川川登74  
TEL:075-406-2212  
<https://www.kyotokitayamamaruta.com/institution/>

広葉樹を用いた床柱・京名栗、  
アテ杉の錆(さび)丸太等を生産・流通する [map6](#)  
原田銘木 京都市右京区京北

様々な種類の北山丸太や磨き丸太などの展示を見学します。貴重な木材たちは、京の背後にある地域の方々により、森林の恵みを巧みに活かす林業・製材・加工の職人等の工夫・技で生み出された多彩な意匠材による「おもてなし」の宝庫を知るものです。自然そのままではなく、人の手と美意識がはいることでその美しさを際立てます。



八幡宮大杉(左)、北山大台杉(右)



桂川での丸太の水運の様子(左 写真提供:嵯峨製材協同組合50周年記念誌)、  
磨き丸太の手運びの様子(右 写真提供:京都北山杉の里総合センター)

林業の里・北山で伐採された北山杉などの銘木は、かつては筏に組んで桂川を嵯峨、嵐山を経て京の町中へ運ばれてきました。運材の歴史は京の都との繋がりが深く、建材は水運で、意匠材は手運びで運んだという歴史があります。古くからの林業地・京北の木材市場には今も多くの材が集まります。保津川の水運は、遊船事業として今もなお、人の手による航路の管理や操船技術が継承されています。全国でも稀有な川文化もまた、京の木の文化とは切り離せない存在です。



株式会社北桑木材センター [map2](#)  
京都市右京区京北下弓削町井下8



京名栗・磨き丸太が使われた  
和風レストランけいほく [map1](#)  
京都市右京区京北下中町町田15-2

京名栗や磨き丸太を使った空間で食事を楽しみ、数奇屋建築の知恵・技・文化を参考にして、日常の暮らしの中で自然を取り入れることを提案しています。京の茶室・数奇屋建築は、「自然を感じる」「自然を心で観る」ために、多彩な木材等を活かす数奇屋大工の技・工夫の結晶であることを知ることができます。



近隣の「道の駅 ウッディー京北」では木を使った土産品などが購入できます。(京都市右京区京北周山町上寺田1-1)

## 木の文化・木のおもてなしツアーとしてのポイント

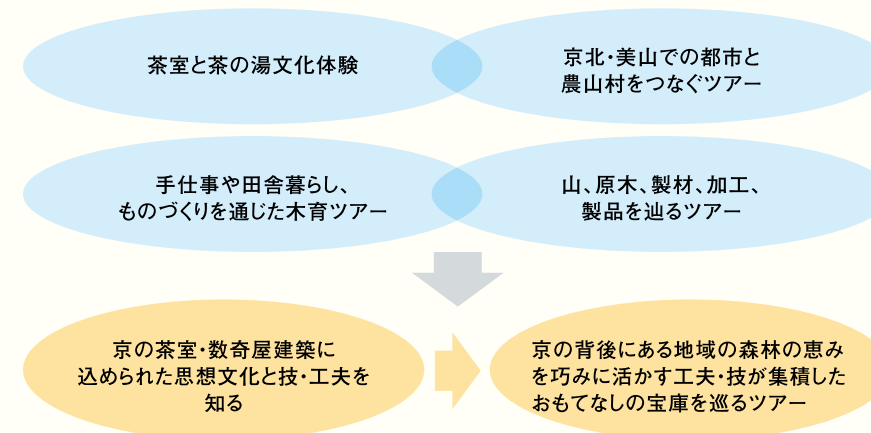
### 開発のステップ

- 連携組織 (役割)** 林業女子会@京都(全体企画、調整)、森の京都DMO(観光ツアーとの連動、調整)、京都府(企画立案)、NPO法人京都・森と住まい百年の会(企画立案)、京都中小企業家同友会・建設部会(企画立案)、アルファトラベル(ツアー調整)
- 企画** 京都の伝統建築、茶室から銘木の木づかい、茶道と炭文化や茶懐石、炭火を通した食の体験と、その背景にある森や炭の加工過程、銘木屋や燃料屋をたずね、環境や木材の多段的な利用方法を学び、女性や暮らしの視点で再編成する。
- 調整** 森の京都DMO、旅行業の事業者、観光ガイド等と連携し、民間で実施できる体制づくり、地域協議会、林業女子会等で製品・サービス等開発。
- 実施** 京の茶室・数奇屋建築を入口に、「自然を感じる」「自然を心で観る」ために、多彩な木材等を活かす数奇屋大工の技・工夫の結晶であることを知り、これらを構成する木材を生み出す京の背後にある地域の人々の技・工夫にスポットを当てた。
- 振り返り** 「悠久の都に森の恵みを運んだ水のみち～杣人と川人が築いた丹波・北山と保津川文化～」をテーマに日本遺産申請中(京都府、京都市、亀岡市、南丹市、プロジェクトリーダー:森の京都DMO)。2020年度は、連携先と民間での試行ツアーを実施予定。

### 企画のヒント

- ターゲット** 旅行事業者、観光ガイドの方、森林・環境活動をしている事業者、団体の方、木材・建築に関わる仕事をしている方、行政・まちづくりの活動をしている方、デザイン、ものづくりの仕事をしている方、学生の方、意欲的に学びたい方
- キーワード** 都の歴史と森、北山杉、茶室文化と数奇屋建築、伝統建築と職人・匠の技、自然共生の精神・知恵とサステナビリティ、暮らしと茶の湯の心、京の美意識と遊び
- 日数・時間** 1泊を基本に近隣観光地と連動した誘客
- 最適参加人数** 1ツアーあたり15名前後
- 広報・情報発信** 森の京都DMOのWebサイト、林業女子会@京都のSNS、国内外に広くPRする

### ストーリーの工夫



## 恵の源流ツアー ～飛騨市広葉樹のまちづくり～

飛騨市は93%が森林に覆われ、その7割は豊かな広葉樹が占めています。古くから木工職人たちは「飛騨の匠」として全国に知られ、飛騨市は飛騨の匠発祥伝説を有する地域です。豊かな森とともに1000年以上も前から受け継がれてきた、ここにしかない技術や、ユネスコの無形文化財に登録されている古川祭などの文化があります。伝統的な木の文化に現代のクリエイティブを掛け合わせ、地域の森林資源を活用した新しいライフスタイルの提案につなげていくツアーです。

### ツアー行程

#### 【1日目】

- ① 広葉樹の森の散策と森で味わうフォレストカフェ
- ② 全国的にも珍しい広葉樹専門の西野製材所
- ③ デジタルものづくりカフェでマイ箸とマイ升づくり
- ④ 恵みの水からつくられた酒・米や地元の食材の夕食

#### 【2日目】

- ⑤ 今も暮らしの息吹が伝わる瀬戸川と白壁土蔵のまち歩き
- ⑥ 飛騨の匠文化館で匠の技体験
- ⑦ ひだ森のめぐみで薬草茶のワークショップ



#### 朝霧の森 map1

【問い合わせ先】飛騨市林業振興課  
TEL:0577-62-8905  
<http://www.city.hida.gifu.jp/> (飛騨市公式サイト)

#### 朝霧の森～広葉樹の森の散策。

飛騨市の93%を占める森林、その7割は豊かな広葉樹です。森を散策しながら木のこと、広葉樹のこと、地域のことを学びます。



フォレストカフェで木々に囲まれながら、くつろぎの一杯を堪能 [map1](#)

休憩は森の中で「フォレストカフェ」。木のカップとプレートで美味しいコーヒーとスコーンで心と体を癒します。トーチでマシュマロをあぶるのも楽しみです。



#### 株式会社 西野製材所 [map2](#) 岐阜県飛騨市 古川町高野367

西野製材所は、近年では珍しくなった広葉樹専門の製材所で飛騨の広葉樹の歴史、広葉樹を無駄なく使いきる木取りなどについて学びます。貴重な材のストックを見て、その大きさに圧倒されました。



多様な樹種の表情に触れ、感じた思いを道具に託す。  
歴史と暮らしを彩る木が、自分だけの愛着ある品になる。

デジタルものづくりカフェ「FabCafeHida」(ファブカフェヒダ)は、飛騨古川の町中にある古民家をリノベーションした施設で、カフェの機能と、ものづくりを行うスペースが一体になった施設です。ここで飛騨市内で伐採された多様な広葉樹の中から好きな樹種を選んで自分だけのオリジナル食器をつくります。今回は飛騨市の森林にある多様な広葉樹でマイ箸や枡を作るワークショップを実施しました。

FabCafe Hida [map3](#)  
岐阜県飛騨市古川町式之町6番17号  
TEL:0577-57-7686  
<https://fabcafe.com/hida/>



味わいも森の恵みである水から。  
おいしく豊かな体験が、木のある新しい日常を想像させてくれる。

夕食は自分でつくった食器や箸で、地元の素材を使った食事と酒を楽しみます。森林のもたらず恵みはおいしい水をつくり、そこから美味しい米や酒が生まれることを実感できます。飛騨在住木作家のグループ「ひだ木フト」プロジェクトでは、小径木広葉樹を活用した新たな製品として、普段の生活で利用する食器や小物等の開発・製作を行っています。  
<https://hidagift.com/>

ひだ森のめぐみ [map4](#)  
岐阜県飛騨市古川町式之町6-7 TEL:0577-73-3400  
<https://www.hida-kankou.jp/spot/6236/>  
(飛騨市公式観光サイト・飛騨の旅)

ひだ森のめぐみでは自分のコンディションや体調に合わせたオリジナルブレンドの葉草茶を試すことができます。





**飛騨の匠文化館** map6  
岐阜県飛騨市古川町壱之町10-1  
TEL:0577-73-3321  
<https://www.hida-kankou.jp/spot/3065/>  
(飛騨市公式観光サイト・飛騨の旅)

**瀬戸川と白壁土蔵街** map5  
岐阜県飛騨市古川町壱之町  
TEL:0577-73-2111 (飛騨市商工観光部観光課)  
<https://www.hida-kankou.jp/spot/1269/>  
(飛騨市公式観光サイト・飛騨の旅)

瀬戸川の流れと白壁土蔵のまちか匠の体験へ  
～伝統の技は今も暮らしを支え、人々の身近にある。

飛騨古川の伝統的木造建築物(古い町並み散策)及び飛騨の匠文化館の見学です。町並みの独自のデザインというのが、「雲肘木(くもひじき)」と呼ばれる、町屋正面の軒に見られる線型(くりがた)です。大工一人一人が自分の雲形をもって、自分が建てた証として雲肘木を残しています。飛騨の匠文化館の建設では飛騨の匠30人が初めて集結し、広縁の屋根にそれぞれの職人の雲形肘木を残しており、ひとつひとつ形の違う雲形肘木を一堂に見ることが出来ます。このような飛騨の匠発祥の地として今も古い街並が残る飛騨古川の町を散策、匠文化館で組木パズルなどの体験を通じた木の活用文化・技の紹介を体験します。

## 木の文化・木のおもてなしツアーとしてのポイント

### 開発のステップ

**連携組織 (役割)** 連携組織とその役割:飛騨市役所(全体企画、広葉樹の街づくり説明、飛騨の森林資源の説明)、myu-kikaku(ツアーコーディネート、ディレクター、ツアーガイド、夕食の企画)、株式会社西野製材所(視察対応、製材技術及び材の説明)、(株)飛騨の森でクマは踊る(視察対応、ものづくり体験アテンド、夕食会場提供)、ひだ森のめぐみ(薬草ワークショップアテンド)、(一社)飛騨市観光協会(企画立案)、飛騨市森林組合(企画立案)

**企画** 地域の広葉樹の新たな活用と飛騨の匠に象徴される技、暮らしの香りを今に残す町並や建築など多様なコンテンツを再編集し、飛騨市の豊かな自然と育まれた技をテーマとする面的なツアーとし、滞在時間延長や物販、広葉樹活用促進、街づくりにつなげる。

**調整** 地域の林業・木材分野、建築・家具・ものづくり分野、木製品企画開発・製作・販売、体験プログラム企画・運営、地元木工作家、観光・まちづくり分野、行政が、木の文化の文脈でコンテンツを持ち寄り、体験型ツアーとして再編集・発信した。

**実施** 広葉樹の森の散策から匠の技体験、伝統的な建築物見学とともに、デジタルものづくりカフェで自らの手でつくる木製品のワークショップとそれを使った地元の食や酒をたしなむなど、木の文化と木のある現代の暮らしを線でつなげるツアーを行なった。

**振り返り** 開催時期を複数設定するなど季節ごとのツアーを検討する。体験の後に物販につながるような仕組みづくりをする。飛騨市広葉樹のまちづくりの中核を担い、ものづくり、滞在、交流などにおいてハブとしての役割を有する第三セクター「(株)飛騨の森でクマは踊る」と連携して展開する。

### 企画のヒント

**ターゲット** 飛騨市の豊かな自然、歴史、伝統、技、街並、食やその背景にある木の活用とものづくり文化に関心のある都市部及び海外から来訪客

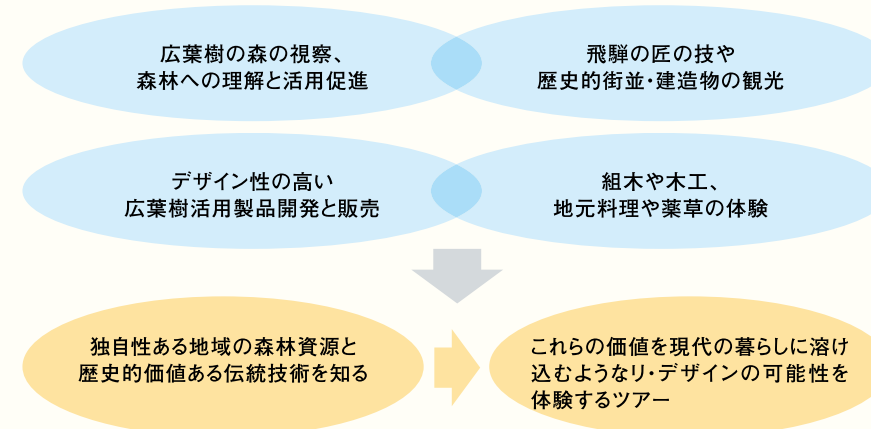
**キーワード** 豊かな広葉樹林、歴史と暮らしが共存する街並、豊かな水が育てる食材と酒、デザイン性の高い広葉樹の木製品、飛騨の匠の文化。

**日数・時間** 日帰りを基本に近隣観光地と連動した誘客。

**最適参加人数** 1ツアーあたり10名前後。

**広報・情報発信** 飛騨市及び(株)飛騨の森でクマは踊るのWebサイトとSNS、飛騨市観光サイト「飛騨の旅」への掲載、展示会等でのフライヤー配布。「FabCafe」ネットワークを通じ、国内外に広くPRする(FabCafe:国内3ヶ所、海外7ヶ所)。

### ストーリーの工夫

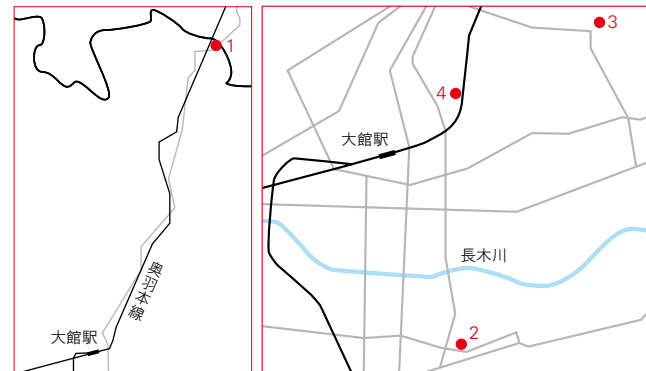


## AKITASUGIツーリズム ～秋田杉へのこだわりと新たな宝の発見へ～

秋田県大館市は「AKITASUGIツーリズム」を実施しました。秋田杉は、かつて豊臣秀吉が造船や伏見城築城のため秋田杉を献上させたことにより、全国的にその名を馳せ、現在も森林資源を有効に活用する生産基盤を有しています。「大館曲げわっぱ」を代表とする伝統的工芸品から桶・樽等の生活用品、建築材料では製材・集成材、さらに土木用資材から木質チップに至るまで幅広い加工技術が集積している地域でもあります。地域の文化・生活を支えてきた森林資源「秋田杉」の価値を再整理し、川上(山)から川下(建築・工芸品等)までのストーリーを付加価値化することで「秋田杉のふるさと」としての地域の価値を高めるとともに、「木を使う」ことへの意識醸成を図ることを目的とするプログラムです。「秋田杉」へのこだわりを感じてもらうとともに、地域の文化に触れながらインバウンド目線で新たな「宝」を発見してもらう機会としています。

### ツアー行程

- ① 矢立峠・天然秋田杉林の散策会。地元ガイドによる矢立峠にまつわる歴史解説。
- ② 旧桜場文蔵邸桜櫓館見学。秋田杉が活用された木造建築物を見学。
- ③ 大館市郷土博物館見学。地域の自然・生物や林業に関する展示品と曲げわっぱ展示室の見学。
- ④ 伝統的工芸品大館曲げわっぱの製作体験。秋田杉に触れ、木目の美しさ、肌触り、香りなどを感じる。



矢立峠風景林 map1  
<http://www.city.odate.akita.jp/dcity/sitemanager.nsf/doc/yataterode.html>  
 (大館市ウェブサイト)



「秋田杉」の美しさ・歴史を感じる～文化庁選定「後世に残すべき文化的景観」に選ばれた“矢立峠・天然秋田杉林”を散策。

「秋田杉」の美しさ・歴史を感じられる、文化庁選定「後世に残すべき文化的景観」に選ばれた“矢立(やたて)峠・天然秋田杉林”で散策会を実施しました。ここでは、イギリス婦人旅行家・イサベラ・バードなど、数多くの先人たちが通った「歴史の道」でもあり、地元ガイドによる矢立峠にまつわる文学や紀行と関係する歴史を解説してもらいます。天然秋田杉に代表される一帯はほとんどが国有林で、「やすらぎの森」「矢立峠風景林」として整備され、現在は遊歩道として残される「歴史の道」は、歴史探訪、小中学校の野外学習、癒しの森林浴、散策コースとして、周辺の温泉とともに親しまれています。



**桜櫓館 map2**

秋田県大館市字中城13-3  
<https://odate-city.jp/museum/information/relation/ourokan>  
 (大館市郷土博物館サイト)

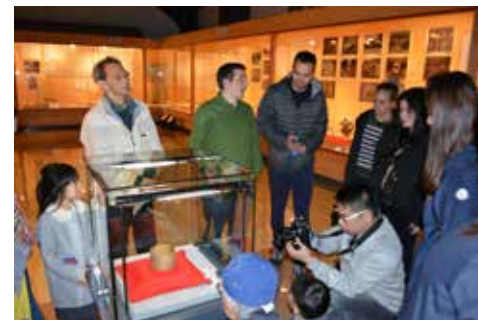
「秋田スギ」空間を体験する～「旧桜場文蔵邸桜櫓館」。  
 秋田スギが活用された木造建築物を見学。

「秋田スギ」空間を体験する ～では、秋田スギが活用された木造建築物「旧桜場文蔵邸 桜櫓(おうろ)館」を見学しました。建物は京間(一間6.3尺=約1.910m)の造りで、普通の部屋より一回り広く造られています。ケヤキの大梁と長尺・幅広の床板、秋田杉の長押(なげし)も、継ぎ足す事なくすべて長尺を使用しています。2階の屋根に突き出るように四方にガラス窓を配した展望台があり、床の間の付書院(つけしょいん)や階段の手すりにも繊細で高度な技術が施されています。武家屋敷に見られる格式の高い「起り破風(ムクリハフ)」のついた玄関なども一見に値します。桜櫓館は、大館旧市街地が度重なる大火に見舞われながらも奇跡的に残る、市街地では数少ない昭和初期の本格木造建築として貴重な存在です。



**大館市郷土博物館 map3**

秋田県大館市釈迦内字獅子ヶ森1番地  
 TEL:0186-43-7133  
<http://odate-city.jp/museum/>



「秋田スギ」と地域の関わりを知る～「大館市郷土博物館」。  
 地域の自然や産業、歴史を学ぶ。生物や林業に関する展示品と曲げわっぱ展示室を見学。

「大館市郷土博物館」を訪ねます。地域の自然・産業・歴史などを学ぶため、自然・生物や林業に関する展示品と曲げわっぱ展示室の見学をしました。



株式会社 大館工芸社 [map4](#)  
 秋田県大館市釈迦内字家後29番地15  
 TEL:0186-48-7700  
<http://www.magewappa.co.jp/>

「秋田スギ」を五感で感じる～「伝統的工芸品製作体験」。  
 大館曲げわっぱの製作体験を実施。

伝統的工芸品大館曲げわっぱの製作体験を実施。  
 実際に「秋田スギ」に触れることで、木目の美しさ、肌触り、香りなどを感じます。

木の文化・木のおもてなしツアーとしてのポイント

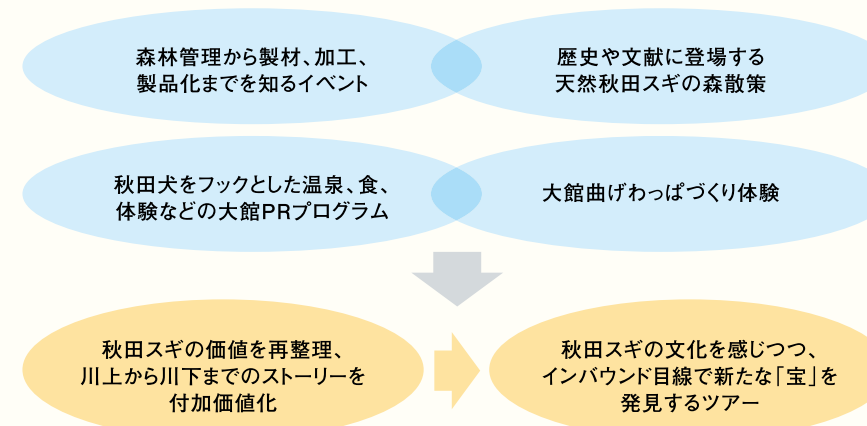
開発のステップ

- 連携組織 (役割)** 大館北秋田地域林業成長産業化協議会(全体企画、各種調整)、一般社団法人秋田犬ツーリズム(インバウンド向け旅行プログラムへ森林・林業分野のスペクイン)、日本語学校「AKITA INAKA SCHOOL」(ツアー参加者コーディネート)
- 企画** 地域の文化・生活を支えてきた森林資源「秋田スギ」の価値を再整理し、川上(山)から川下(建築・工芸品等)までのストーリーを付加価値化することで「秋田スギのふるさと」としての地域の価値を高めるとともに、「木を使う」ことへの意識醸成を図る。
- 調整** 林業成長産業化協議会と一般社団法人秋田犬ツーリズムと連携、大館市と接する小坂町(こさかまち)にある日本文化を学び、田舎を体験する外国人向け日本語学校「AKITA INAKA SCHOOL(アキタ・イナカ・スクール)」の学生の参加を募った。インバウンド目線で地域の新たな森の「宝」を発見してもらった機会とした。
- 実施** 歴史ある森の散策で地元ガイドによる矢立峠にまつわる歴史解説、空間を味わうために「秋田スギ」が活用された木造建築物を見学、大館市郷土博物館では地域の自然・生物や林業に関する展示品と曲げわっぱ展示室を見学した後、伝統的工芸品大館曲げわっぱの製作体験を実施し、木目の美しさ、肌触り、香りなどを感じてもらった。
- 振り返り** 地域の森林・林業や「秋田スギ」の活かし方について、インバウンド目線での意見やアイデアをアンケート等で募り、その結果を「林業成長産業化地域創出モデル事業」での地域材の利用促進の取り組みへの反映を目指す。

企画のヒント

- ターゲット** 多様な海外からの留学生を受け入れている日本語学校からの参加者を起点とした国内外の来訪者
- キーワード** 天然秋田スギと歴史の道、自然・産業・歴史と秋田スギの深い関わり、秋田スギを使った歴史的木造建築物、伝統的工芸品・曲げわっぱづくり
- 日数・時間** 日帰り～1泊2日
- 最適参加人数** 1ツアーあたり20名前後
- 広報・情報発信** ホームページ等(秋田犬ツーリズム)で森林・林業分野を活用した観光アクティビティとして登録し、流通させることで旅行商品化を目指す。

ストーリーの工夫



## 裏木曾加子母 ～樹を知る 木と暮らす～

岐阜県中津川市加子母では、～樹を知る 木と暮らす～ツアーを実施しました。昔から長野県側を「木曾」、岐阜県側に位置する加子母・付知・川上の3ヶ村は「裏木曾」と呼ばれ、良質なヒノキが生産される森林資源の宝庫でした。そのため、江戸時代は徳川尾張藩の直轄地として「山守」により森林が管理され、「木曾五木」と云われる「ヒノキ・サワラ・アスナロ・ネズコ・コウヤマキ」は御用材以外の伐採は禁止され、「檜一本首一つ」と語り継がれるほど、明治までの約260年にわたり厳しく管理されました。その山守が守ってきた山々の歴史・文化やそこでの暮らしを学びつつ、今に引き継がれる木を活かす生業を巡ります。

### ツアー行程

#### 【1日目】

- ①護山神社
- ②加子母森林組合
- ③梅田製材所
- ④桂川木工
- ⑤ひのき箸工房
- ⑥山守資料館(山守内木家)

#### 【2日目】

- ⑦かしも明治座



**神宮備林** 加子母の奥山、出之小路(加子母裏木曾国有林)には、木曾ヒノキ備林(旧神宮備林)があります。古くから伊勢神宮の式年遷宮で使用される御用材をはじめ、近年では木造建築文化財の修復材や伝統的建築物、例えば名古屋城本丸御殿などにも活用されています。(写真左・伊勢神宮御神木伐採式、右：名古屋城本丸御殿)

護山神社 map1 岐阜県中津川市付知1594



御祭神は木曾総山の総鎮守。1838年(天保9年)に江戸城・西の丸が焼失し、再建のため裏木曾・木曾山中より用材を大量伐採しました。その際に山中ばかりか江戸城・大奥にま



暮らしを彩るヒノキ製品をつくる職人を訪ねる。歴史あるヒノキを、暮らしに取り入れてみる。

### 「挽」製材 梅田製材所

加子母は製材所が多く、木を並べて乾燥させている風景をあちこちで見ることができます。その1つ梅田製材所で、建築材として用いられる年輪のつまった淡いピンクが美しい「東濃ヒノキ」の製材を学びます。



### 「突」経木 桂川木工

昔から通気性や殺菌性に優れており弁当の折箱などの包装に用いられました。現在は用途が減りましたが環境に優しい素材として再び注目されています。



### 「削」箸 ひのき箸工房

職人 今井 忠吉さんが作る「ひのき箸」。今井さんの指導を受け、参加者も実際に木を削り、やすりで磨き、箸づくりを体験しました。



モクモクセンター(加子母森林組合) map2

岐阜県中津川市加子母4872-5

TEL:0573-79-3333

URL: [wwwhttp://www.fa-kashimo.jp/](http://www.fa-kashimo.jp/)

地元の職人がつくる木製品や家具等を購入だけでなく、東濃ヒノキを自分で削り、色をつけて作るお箸づくりも体験することができます。



山守資料館 map3  
 岐阜県中津川市加子母4092  
 問い合わせ先(要予約):  
 yamamori.museum@gmail.com

古文書から明らかになった「山守」の仕事を、  
 山守が暮らした築250年の古民家で学ぶ。

「山守(やまもり)」とは、江戸時代に、乱伐により枯渇してしまった森林資源を守るため、尾張藩により任命され、山の管理に携わっていた役人のことを言います。加子母は豊かな森林があり、良質なヒノキがとれるため、信長も秀吉も家康も天下を取った大名は、最初に加子母を含む木曾の山々を支配下に置きました。家康が手中におさめた後、元和元年(1615年)尾張藩に山の権利は譲られました。

「山守資料館」の館長である内木 哲朗(ないき てつろう)さんの先祖は享保15年(1730年)から明治5年(1872年)まで6代にわたって山守を仰せつかっており、ご自宅であり私設の資料館には約3万点もの古文書が保存されています。内木さんは、この資料館を通じ、加子母の山々や森林について伝えるべく尽力されています。古文書の中には、約250年前に書かれた山守の日記もあり、当時の裏木曾の山々の記録や、森林の保護や整備、違法伐採の取締り等といった山守の仕事、それだけでなく日々の食事や近所づきあいの様子など加子母の人々の暮らしぶりが生き生きと記されており、当時の様子を知ることができます。



「山守」が暮らした古民家の囲炉裏を囲みながら、  
 山守の暮らしを学ぶ。  
 加子母の郷土料理を食べながら、  
 地元住民と交流する。

山守が暮らした民家がそのまま残されている「山守資料館」で、山守の末裔である内木さんから山守の仕事や当時の加子母の人々の暮らしの様子のお話を、囲炉裏の火を囲みながら伺います。内木さんが説明に用いられる資料には、所々温かみのあるイラストが。これは、加子母在住のイラストレーター・本間 希代子さんにより描かれたものです。夕食では、朴葉ずしや芋もち、飛騨牛など加子母の山や自然の恵みをふんだんに活かした料理をいただきました。食卓には、地元の職人さんの手で作られたヒノキのお箸やお猪口も並び、加子母の木の文化も楽しむことができます。



「山守」の日記に記された当時の暮らしや人々を本間さんが描いたもの。



かしも明治座 map4  
岐阜県中津川市加子母4793-2  
TEL:0573-79-3611  
URL:http://meijiza.jp/

明治27年に地元の人々の手によって建てられた  
木造の芝居小屋「かしも明治座」の見学と隈取り体験

「かしも明治座」は、明治20年代の村芝居全盛期に建てられた、廻り舞台やスッポン、両花道を備えている、当時の芝居小屋の様子を今に伝える貴重な木造建築です。当時は尾張藩政時代の名残りから、娯楽施設のためにヒノキを使うことへのためらいがあったためか、建物には地元のモミヤスギ、ケヤキなどが活用されています。毎年春にはクラシックコンサート、秋には地元加子母歌舞伎保存会による素朴な地歌舞伎が上演されます。ここでは、保存会の面々による 歌舞伎独自の化粧方法「隈取り」の体験ができます。



#### 樽葺き屋根の“板へぎ”体験

「かしも明治座」は、平成27年に伝統工法による改修が行われ、屋根も創建当初の「樽葺き石置き屋根」が復元されました。屋根には、職人の手作業によって、1枚1枚剥いだクリ材、サワラ材の板が約8万枚、石が700個のっています。ツアーでは、地元の職人 桂川隆さんに樽板づくりの行程“板へぎ”を実演いただき、参加者もその技を体験しました。

## 木の文化・木のおもてなしツアーとしてのポイント

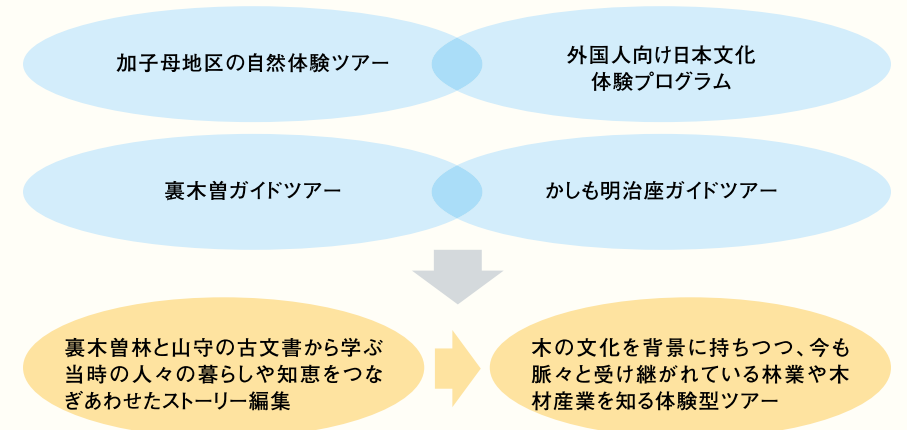
### 開発のステップ

- 連携組織（役割）** 加子母農林泊推進協議会事務局（事業全体の取りまとめ）、裏木曾古箏の森育成協議会登録ガイド（神宮備林案内）、中津川北商工会加子母支所（木工業、建築業、バス事業者、旅館業者との調整）、中津川市役所林業振興課及び観光課（継続的な事業展開に向けての助言）
- 企画** 現在も脈々と受け継がれている林業や木材産業を知ってもらい、木材の需要拡大につなげていく体験型ツアー。
- 調整** 地域内の林業・木材関係団体、観光事業者との連携を図り、「木の文化」切り口とした観光及び林業振興への展開を図った。
- 実施** 伊勢神宮式年遷宮の御杣山にも指定されている加子母裏木曾国有林と、尾張藩山守の古文書から明らかになりつつある当時の人々の暮らしや知恵をつなぎあわせたストーリーを編集し、歴史・文化・暮らしを学びつつ、現代の木を活かす生業を体験するツアーとして実施した。
- 振り返り** インバウンドのターゲットとしては飛騨高山、馬籠宿等への一般旅行者の誘客を期待している。また、加子母地域では大学と地域が連携し地域の活性化を図る「域学連携事業」に取り組んでおり、各大学への留学生をターゲットに募集を行う。

### 企画のヒント

- ターゲット** 伊勢神宮式年遷宮、名古屋城の築城など、日本の伝統的な木造建築を支えてきた「木曾ヒノキ」のルーツに関心のある都市部及び海外から来訪客
- キーワード** 300年の悠久の時間をかけて育ててきた「木曾ヒノキ」、裏木曾の山々を守ってきた尾張藩山守内木家、毎年地歌舞伎が上演される芝居小屋「かしも明治座」
- 日数・時間** 日帰りもしくは、国有林内にある一軒宿「渡合温泉」に宿泊する1泊2日。5月の新緑から11月の紅葉シーズンがベスト。
- 最適参加人数** 1ツアーあたり10名～20名程度
- 広報・情報発信** 名古屋城関連行事でのチラシ配布、加子母農林泊推進協議会、裏木曾古事の森育成協議会のWebサイトやSNSでの発信

### ストーリーの工夫



## 木の文化・木のおもてなし ツアー・プログラム企画化のヒント

### ●地域内の「木の文化」を活かした「木のおもてなし」要素の掘り起こし

木の文化を背景とした多様な資源やコンテンツを探りましょう。これらを単体ではなく、ひとつのストーリーとして連動して体験していただくことが大切です。

地域に根差した木の文化と伝統工芸、伝統文化が連動、連携しているものはあるか？

例：漆器、指物、寄木細工、桶・樽、木彫、その他木工全般など

地域に根差した木の文化と飲食が連動、連携しているものはあるか？

例：酒、味噌、醤油、発酵食品、食器、飲食店舗など

地域に根差した木の文化と宿泊施設や運輸・交通が連動・連携しているものはあるか？

例：旅館、ホテル、民泊、駅、鉄道、船舶、その他移動手段など

地域に根差した木の文化と文化交流施設が連動、連携しているものはあるか？

例：文化・観光施設、交流施設、商業施設など

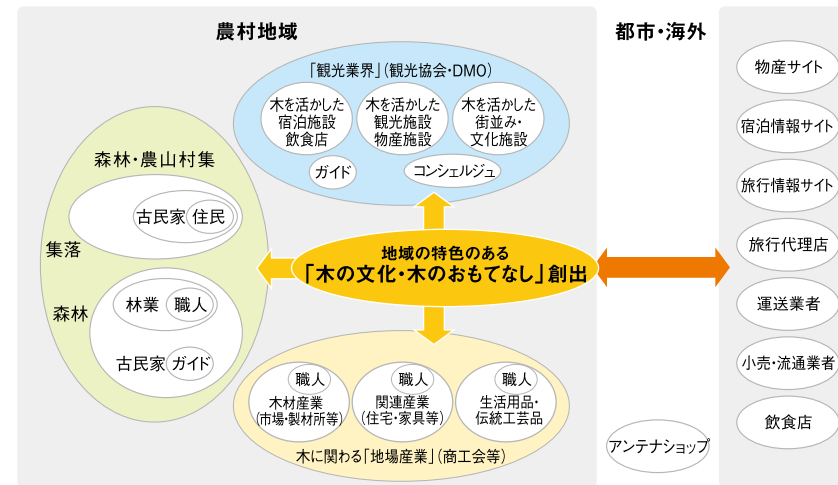
地域に根差した木の文化と文化交流施設が連動、連携しているものはあるか？

例：観光拠点、公共空間、各種コミュニティなど

### ●地域での展開タイプ（実施体制の構築）

地域でツアーやプログラムを企画・開発・実施するには異分野・異業種によるチーム（連携組織）の確立が欠かせません。どの分野が主導する場合であっても、各分野の持つ強みや個性を木の文化の視点から再整理していくことが重要です。

- ① 「観光分野」（観光協会・DMO）が主導する場合
- ② 「地場産業」（木材業界・伝統工芸等）が主導する場合
- ③ 森林等の「施設・ガイド」が主導する場合
- ④ 「森林・林業関係者」が主導する場合
- ⑤ その他（都市部の小売・流通、飲食店等が主導する場合）



### ●ツアー・プログラムの企画のヒント

- ステップ1 ビジョンの整理と共有 ———— 「何のために」「誰に対して」「何を実施するのか」
- ステップ2 要素の掘り起こし ———— 地域の木文化を背景に持つ「施設・拠点」「製品」「飲食」「体験・慣習」の発見（前ページヒント参照）
- ステップ3 ツアーの企画 ———— 「テーマ」「メニュー」「ターゲット」「時間・日数」「参加人数」等の設定（下段の企画のヒント参照）
- ステップ4 モデルの検証と評価 ———— 「モニターツアー等の実施」「ターゲットの評価や意見の収集・分析」「結果に基づく企画のブラッシュアップ」
- ステップ5 プロモーションと販路開拓 ———— 「多様な発信ルートの活用」「都市部や近隣観光地との連携」「旅行やインバウンド向けサイトの活用」
- ステップ6 継続的な企画の見直しと進化 ———— 「改善すべき点の抽出と修正」「進化すべき点の抽出と追加」

### ●ツアー・プログラムの企画のヒント

#### ターゲットの明確化と わかりやすいキーワードづくり

一般来訪者（インバウンド含めて）は森林や木材、技術や技法、素材等についての知見が多いため、わかりやすいキーワードでレクチャーや案内をすること。そのためにはターゲットの絞り込みとターゲットごとのキーワード化が必要。

#### ツアーの日数・時間・期間の設定

地域ごとに有する地理・気候を活かした「季節ごとのプログラムの企画化」や時期ごとの慣習・風習・行事等との連動で木文化・木のおもてなしのコンテンツを整理していくことでリピーターや興味関心ごとの訴求が可能となる。また近隣の著名観光地からの誘客なども考慮し、半日・日帰り・1泊2日、中長期滞在型などのプログラム構成も重要である。

#### 適切な参加人数の設定

体験・視察プログラム等は参加人数と内容の密度が反比例することが多く、参加者の上限設定には配慮すべきである。一度に情報が届く範囲・人数をあらかじめシミュレーションし、参加者の満足度を上げる工夫を。

#### SNSメディア等の有効活用

ツアー・プログラムで幅広い層への情報伝達はSNSなどのソーシャルメディアの活用が有効である。そのためのデザイン・ビジュアル化・スポットづくりをプログラムに埋め込むことで参加者自らが発信しやすくなるようなきっかけを生む。

#### 川上～川中～川下にこだわらない、 ストーリーありきのプログラム構成

地域の持つ木の文化のストーリーを重視し、現代の暮らしに生きる木のおもてなしや製品、空間などから入り、その技術、素材、そして森林へと遡る構成や食や住宅などの暮らしのシーンから入って歴史的な木の文化に辿りつくツアーなども検討したい。

#### 時限的な体験を恒常的な体験に転換する

時限的な体験や見学に留まりがちなプログラムも、自分でつくった木製品や気に入った製品をすぐに購入できる仕組み（ネット通販等も活かして）を考えることが重要。これによって帰宅してからの時間も地域の木文化・木のおもてなしに触れることができ、恒常的な体験となる。

#### 時代を先取りしたテーマとの連携

木の文化は必ずその地域や分野の人々の生業と関係している。健康・癒し・発見・学び・グルメなど、時代のニーズに合ったテーマと木の文化・木のおもてなしの融合を考えること。こうした分野の事業者・専門家・クリエイター等を協働チームに参画させる。



公開座談会『世界に誇る日本の「木の文化・木のおもてなし」を考える』  
～インバウンド促進・地方創生・地域材の需要拡大に向けて～

本事業の趣旨に則り、第一線で活躍する隈研吾氏（建築家）、デービッド・アトキンソン氏（小西美術工芸社社長）、涌井史郎氏（造園家）の、本事業の検討委員もお務めいただいた3名による「公開座談会」を開催しました。世界からの日本への注目が高まるなか、我が国が培ってきた「木の文化」を活かした「木のおもてなし」による、インバウンド促進・地方創生、地域材の普及拡大の可能性等について、広い視野から議論が展開されました。

世界からみた日本の農山村や木の文化や木のおもてなしを  
そう発信していけばよいでしょうか

涌井氏

日本と海外の国立公園の違いをひと言で言うと、海外の国立公園は一枚の絵はがきで語り尽くせるが、日本は半分ほどが民有地のため、厳しい自然と対峙しながら、いかに自然共生をした暮らしを築くか、景色だけでなく、生活の文化、とりわけ中山間地域の生活を見ることができるといってとても奥行きがあります。出雲地方にある大山・隠岐・三瓶山の一角に、出雲大社がとんでもない高さの社殿を持っていた神話話があり、これほどの材は存在しないだろうと思っていましたが、三瓶山の埋木林を見て驚きました。大径木で高さが30mほどあり、このくらいの高さがあれば出雲大社の神話の社殿が作ることができるということがよくわかりました。記録をみると、里山から木を出していたことが、出雲国風土記に書いてあります。ここからも、日本人と木の関係ははるか昔から築かれてきたことを実感します。

アトキンソン氏

日本は木の文化で、海外は石の文化ということがよく言われていますが、これは誤解です。欧州で文化財指定をされている建築物の9割が木でできています。日本家屋は木



涌井史郎  
東京都市大学特別教授、岐阜県立森林文化アカデミー学長。造園、ランドスケープアーキテクトとして「景観十年、景観百年、景観千年」と唱え、人と自然の空間的共存をテーマに多くの作品や計画に携わっている。

な自然資源と情報を結びつけると山村ではさまざまな取組ができると思います。その間を取り持つ存在が木でないかなという気がしています。

木の文化の再評価のためにどのような視点を持つべき、  
価値をどこに見出すべきでしょうか

隈氏

日本人は寸法の採り方や材料の選び方、面の取り方など、人間が木に対して親和性を感じられるように扱ってきました。それを数千年に渡って実践してきた国ではないかと思っています。図面に寸法は書けても、木をどのように扱い、仕上げるかなど、図面に書き切れないこともたくさんあります。図面に書かなくても、日本ではこの部分を日本のシステムがやってくれています。森を伐って、製材し、加工し、最後に取り付ける全体のシステムが、人間と木の親和性を強めるようにできているのですが、そのシステムがないところに図面だけ渡してもうまくできないということを何度も体験しました。こうした深いシステムが日本にはあるということを実感し、この存在を無視しては語れないと思いました。

涌井氏

例えば、南の斜面に生えていた木と北の斜面に生えていた木では年輪の入り方が全く違いますね。それらを乾燥していった時に、たわみ方やゆがみ方も全く違います。どの方向にどの材を使うか、どこまで曲がりを許容できるか、など非常に微妙なところまで計算されています。木を命の材料として扱ってきたことは事実です。それをお互いに理解しているため、単なる素材というより生き物として取り扱っているのだと思います。

アトキンソン氏

日本家屋や日本の木の使い方、日本の漆文化が素晴らしいとか、職人の技術や手先に感動すると言っても、私は日本人が消費していない、買っていないことが大きな問題だと考えています。例えば、日本産漆を使うところがどこもなかったが、文化財に強制的に使うことで需要も生まれ、400kgまで減ってしまった日本産漆は2tまで復活することができました。誰も買わないものは、自慢して感動してもらっても意味がありません。日本の木の文化も日本人のひとりひとりが買い、使えば、自然に復活するものだと思っています。

涌井氏

まさにそこが大事な点です。自分の近くに本物を置くことの大切さを知ることです。アト

隈研吾  
建築家。その土地の環境、文化に溶け込む建築を目指し、ヒューマンスケールのやさしく、やわらかなデザインを提案、国内外で実績多数。国立競技場に47都道府県の木を使うなど、木の建築を多く手がける。





デービッド・アトキンソン  
小西美術工芸社社長。元  
ゴールドマン・サックス証券ア  
ナリスト。2009年、国宝・重  
要文化財の補修を手がける  
小西美術工芸社に入社。20  
11年に同会長兼社長に就  
任。日本の伝統文化を守りつ  
つ、日本の観光立国へ向けた  
改革の提言を続けている。

キンソン氏は町家にお住まいということですが、町家の模様替えは大変な作業です。冬と夏では全く違いますし、敷物も障子も替えて、すだれの長さも変えなければなりません。季節ごとに手間をかけるという点に美しさがあると思いますが、そうした手間を日本人は忘れてしまったかな、とも思います。その本質をアトキンソン氏から教えられて恥じるばかりですね。

これからの地方創生に、  
いかに木の文化を活かしていくべきでしょうか

#### 涌井氏

地方創生は重要な課題ですが、日本が産業基盤を強化するためには、日本人が持っている感性価値を高め、クリエイティビティをいかに目覚めさせるかにかかっていると思います。文化力が産業につながっていくことが非常に大事です。今はそれが失われているように感じます。日本人の創造性の原点は、自然とともに暮らしていくという点に大きなヒントがあって、使い回し・作り回しといった「まわしの文化」があります。これは日本の木の文化の素晴らしい点です。

#### 隈氏

世界の全体マップの中で、この場所には何があって何が売りなのかを客観的に語れ

る人が少ないのだと思います。私は世界の様々なリゾートの仕事をしてきましたが、世界のトップ・ブランドの人達とお付き合いの中で、彼らが何を求めているかを知る機会を得ました。世界中に地方があるなかで、その地方の何を売りにすれば世界で勝てるか、それを深掘りする意識を日本の地方や職人にも持って欲しいと思います。

#### アトキンソン氏

日本は高いレベルの西洋文化を満喫できる国で、それを否定するつもりはありませんが、日本から日本文化がなくなっているということは非常に不思議な現象です。その犠牲になっているのは、やはり地方でしょう。日本の伝統文化の99%は地方に生きています。なぜ、両方できないのでしょうか。ピアノをやっている人はお茶もやったらよい。漆の椀を買えば輪島のためになる、部屋の一部でも木を使うことでどこかの森がよくなる、そこに思いを巡らせて欲しいと思います。「日本的なこと」を皆が勉強して、両方の文化を楽しんで、世界一豊かな国民になればいいのでは、と私は思います。

最後に、木の文化、木のおもてなしに関わる皆さんに  
メッセージをいただけますか

#### 涌井氏

シームレスな時間の流れに価値を見いだしていた日本人が、時間をぶつ切りにして、都合の良いところだけを取り出してしまい、その関係が断絶したという事実が一番大きいのではないのでしょうか。手間や面倒は実は文化なのです。ものに置き換えることであたかもそれが文化であるかのようになってしまっていて、行為を文化にこななかった。ここに大きな間違いがあるのではという気がしています。

#### 隈氏

建築では、木を使うという点ではレベルの高い世界では明らかに変わってきており、それは良いサインだと私は思っています。ニーズがあり、さまざまな人が使い始めれば、自ずと技術もついできます。この座談会の会場である神田明神の文化交流館も見せていただきましたが、木でも燃えない技術がさまざまに登場しています。最近では、リグニンという成分が目目されており、これは軽くて強いのですが、木によって成分が異なり、気候によってもリグニンの編成が変わってしまうので、処理しにくい点が課題でした。しかし日本の杉だけはリグニンはほぼ同じ成分で、これは世界でも非常にまれな例だと

言われています。日本の杉のリグニンを使えば、プラスチックより軽く強い繊維ができます。木の可能性は大いに広がっていて、悲観することはない、ということが私からのメッセージです。

#### アトキンソン氏

メディアで紹介されているような日本文化は表層的な部分であって、実際に勉強するともっと幅があって、奥が深いということがわかります。しかし、これはあまり紹介されていません。こうした文化を持ちながらも活用していないことは大きな損失です。文化の深い部分を解説して、それを理解することから、新しいアイデアが生まれてきます。知らなければ平凡なものしか生まれてきません。文化・歴史にこそ、多様なヒントがあります。そのためには勉強しなければいけません。名目上は外国人のためであっても、最もためになるのは日本人でしょう、と私はいつも思っています。

#### 涌井氏

日本人として、日本の気質のようなものについてお互いに理解をし、それをプロモーションするということがとても大事ですね。Society5.0の時代になり、デジタル社会は今後も進まざるを得ないと思いますが、私たちは精神性や心情を持ち合わせているわけですから、これはシームレスです。文化や教養がベースになって、初めて自分自身を癒やすこともできるでしょう。日本文化の特質は、空間と空間の関係性、時間と時間の関係性、その関わりに手間をかけ文化的に表現してきた点が大きな価値だと思います。皆さん、本日はどうもありがとうございました。



座談会会場のご紹介  
公開座談会は神田明神「明神会館・竹の間」(写真左)で開催されました。また、「神田明神文化交流館 EDOCCO」(写真右)は神田明神内にある日本文化を伝える複合施設で空間や物販に由来のある多摩産材が使われています。(東京都千代田区外神田2-16-2)



### 2018年度事業の成果紹介

「木の文化・木のおもてなし」ガイドブック  
「木の文化・木のおもてなし」の考え方を整理し、  
12事例等を紹介



「木の文化・木のおもてなし」コンセプト映像  
モデル的に、秋田・静岡・奈良を題材に  
コンセプト映像を制作



「木の文化・木のおもてなし」検討委員メッセージ  
5名の審査委員のメッセージ等を紹介



詳しくは、「木の文化・木のおもてなし」特設ページをご覧ください。  
<http://www.green.or.jp/topic/omotenashi/>

木の文化・木のおもてなし ガイドブック 2019  
【モデルツアー・公開座談会】

発行元:  
公益社団法人 国土緑化推進機構  
株式会社 ユニバーサルデザイン総合研究所

林野庁補助事業

デザイン: 則武 弥 (ペーパーバック)  
印刷・製本: 株式会社サンワ

記載内容・写真等の無断転載・複写を禁じます

